

認知症高齢者との関係を生きることとしての「我 - 汝」

汝として呼びかけられる実践に向けての一考察

淑徳大学 井上 敦 (007468)

キーワード：認知症高齢者・対人援助・「我 - 汝」

1. 研究目的

社会福祉現場において基本となるかかわりが援助者と利用者との二者関係であることはあらためていうまでもないだろう。社会福祉援助技術の一つとして数えられる共感や傾聴や受容のいずれにしても援助者と利用者との二者関係がまず前提として考えられているとあってよい。さらにいえば、それらの社会福祉援助技術の最重要項目は援助者が利用者に対してどれほどの関心を向けているかという一点に集約されているとあってよいだろう。援助者が利用者に対して一切関心をもたずに共感や傾聴や受容といった社会福祉援助がなされるなどということは考えられない。その意味で、利用者に対峙する援助者にまずもって求められることは利用者に対してどれほどの関心を向けているかにあるといえる。

しかし、援助者が対峙する利用者に関心を向けているということだけで十分であるといえるかどうか。というのも、対峙する利用者が例えば重度の認知症を患っている場合、援助者であるこちら側がいくら相手に関心を向けようと努力しても利用者である相手が一向にこちらに関心を向けてくれないという不測の事態が生じることがあるからである。

本報告ではこの、相手に関心を向けることの重要性にとどまらず、相手から関心を向けられることの重要性について、とくに 20 世紀のユダヤ教宗教哲学者であるマルティン・ブーバー (Martin Buber:1878-1965) の「我 - 汝」に焦点を当てて考察を展開したい。

2. 研究の視点および方法

ある小規模多機能型施設での認知症高齢者との実際のかかわりから問われてきた援助とそのかかわりのありようを概念化し、それについての理論的考察をおこなう。

3. 倫理的配慮

施設名・利用者名・職員名等はアルファベットで表記することにより当該施設および個人を特定できないように配慮する。また、本研究の内容に関しては淑徳大学研究倫理委員会への申請を予定している。

4. 研究結果

本報告では主として報告者がボランティアとしてかかわっている小規模多機能型施設

での利用者（認知症高齢者）とのかかわりを手がかりとしたうえで、援助の基盤となる援助者と利用者との対人関係の理解を企図している。

ブーバーはかつて主著『我と汝』において人間のあらゆるものに対してかかわる態度のありようを二つの根元語に応じて明確に区分した。そのうちの根元語の一つが「我 - 汝」であり、いま一つが「我 - それ」である。ブーバーによれば、これら二つの根元語のうちに現れる我は目の前の対象（それが人間であろうと事物であろうと）を「（「我 - 汝」における）汝」としてみなすか、それとも「（「我 - それ」における）それ」としてみなすかによってそのありようが異なる。つまり、「根元語が二つあるからには、人間の我もまた二重である」（M・ブーバー（田口義弘訳）『我と汝・対話』みすず書房，1978年，5頁。傍点は著者）ということである。「根元語・我 - 汝における我は人格（Person）として発現し、自己を（従属的な属格を持たぬ）主体性として意識する」のに対し、「根元語・我 - それにおける我は個我（Eigenwesen）として発現し、自己を（経験と利用との）主体として意識する」（同上，84頁。傍点は著者）。誤解を恐れずに簡略化していえば、「我 - 汝」における我のありようは目の前の対象を個別的でかけがえのない存在とみなし接する態度であるのに対し、「我 - それ」における我のありようは目の前の対象をみずからの所有物としてしかみなさない態度であるといえるだろう。このブーバーの考えに基づいて援助者と利用者との関係を鑑みるならば、当然そこで求められる援助者の態度のありようは利用者を一人の人格ある個人としてみなす「我 - 汝」における我のありようであるということになる。

しかし、（私側の視点からして）援助者と利用者との関係のありようがお互いに一人の人格ある個人として関心を寄せ合っている、つまり「我 - 汝」にあるといえる場合には当然ながらその裏面としては（相手側の視点からも）「我（利用者） - 汝（援助者）」として感受されているはずである。いいかえれば、利用者が援助者に関心を向けていないにもかかわらず、つまり、利用者（我）が援助者を汝として認めていないにもかかわらず、ただ援助者が利用者に汝として関心を向けているからという理由だけで「我 - 汝」が成り立つなどということとはありえない。そのようにして、援助者が利用者を人格ある個人としてみなしている（と思っている）という理由だけでただちにその関係のありようを「我 - 汝」としてとらえることは、厳しくいえば援助者にとって都合のよい錯覚にすぎない（かもしれない）。この意味からして援助者と利用者との関係においてその関係が「我 - 汝」として実現されるには援助者が利用者に対して汝として関心を向けると同時に、利用者が援助者に対して汝として関心を向けてくる必要がある。ブーバーが述べるように、「我 - 汝」において「私が汝と出会うのは、汝が私に向かいよってくるからである」（同上，17頁。傍点は著者）。われわれは往々にして一方の、援助者が利用者に対していかに関心を向けるかという援助者から利用者への視点にばかり傾注しがちであるが、それと同時かつ同等に、他方において援助者は利用者からいかにして関心を向けられるのか、そしてそのために援助者にできる努力はなにかという視点をも常に見据えなくてはならないだろう。